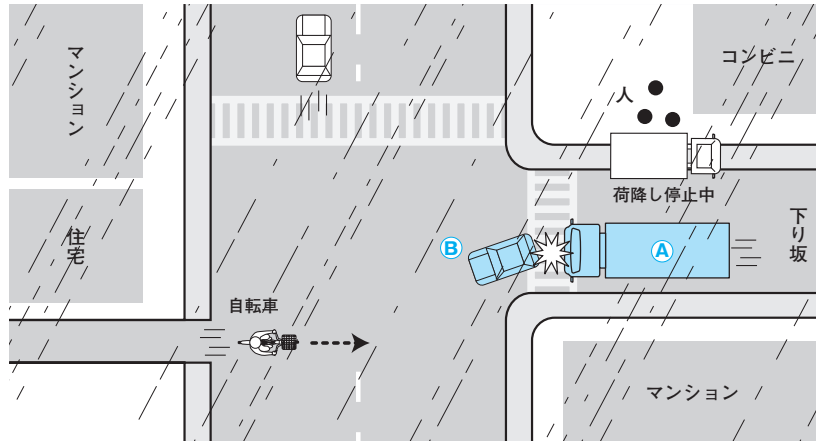


職場における交通安全指導

Part 77

交差点を左折する際、急停止した前車に追突



■事故の概要

●発生日時

日 時：平成21年 6 月某日 午後 8 時30分頃
天 候：雨

●道路状況

中央線のない狭い道路と片側 1 車線道路が交わる市街地の交差点

●事故の当事者

運転者 A（普通貨物車）：59歳、男性
被害者 B（普通乗用車）：46歳、女性

●被害状況

A：前部バンパー破損
B：頸椎捻挫（全治 1 か月）

事故状況

A は、乗務歴が30年になるベテランで、事故歴もほとんどない模範的な運転者であった。

これまで大型貨物車による遠距離の輸送業務を主としていたが、最近では年齢と共に体力に不安を感じるようになったことから、普通貨物車での近距離配送業務に従事していた。

当日は強雨の中、食料品を搬送するため早朝に会社を出発し、数箇所の店舗への配送を終え最後の目的地へ向かっていたが、駅周辺の幹線道路で交通渋滞に巻き込まれ、到着予定時刻に遅れそうになっていた。

A は遅れを取り戻すために近道をしようと、予

定していた運行経路を避け、マンションが建ち並ぶ住宅街の道路を選び、道路幅の狭い急な下り坂を被害者 B の普通乗用車に追従する状況で交差点の直前に差し掛かった。

事故発生場所の交差点は、信号機は設置されていないが、車や人の往来は頻繁で、当時、道路の反対側には小型貨物車が駐車しており、その車両の陰で 2 ～ 3 人が立ち話をしていた。

A は、B が左折の合図を出し横断歩道を渡ろうとしているのを見て、同様に合図を出し左折の態勢に入ったが、車両の陰の人が気になっていたことから、その方向へ視点を移し様子を窺った。

その直後、前方車両が停止するような気配を感じたため、直ちに視線を戻したところ、直前で B が停止していた。A は慌ててブレーキを踏んだが間に合わず追突し、B に怪我を負わせてしまった。

A が駐車車両の陰に注意を取られていたときに、B の直前には路地から飛び出してきた自転車があり、B は急停止をしていた。

この事故を振り返ってみると、事故の原因は、A が B に接近して走っていたにも関わらず、車両の陰の人に気を取られて脇見をしたため、前車の動静に気付かずブレーキのタイミングが遅れたことである。

しかし、その背景には急な下り坂を、しかも雨で路面が濡れた状況であるのに、車間距離を詰めて走行した状況判断の甘さがあった。

安全指導

① 自己管理の徹底

●体調の管理

A は、前日が休みであったことから、久々に家族で行楽に出かけ、帰宅後床に就いた時には午前 0 時を回っていました。

当日は週明けということもあり、普段に比べ多忙な業務スケジュールが組まれており、早朝に出勤、出発していたことから、若干寝不足の状態にありました。さらに、その日は思わぬ交通渋滞にも巻き込まれ、普段より乗務時間も長くなってしまい、疲労感も高まっていました。

A が体力的に不安を感じ普通貨物車に乗り換えたことを考えれば、A 自身が体調の管理に配慮する必要性がありました。

運転者にとって最も重要なことは体調の維持管理で、特にトラック運転者は、安全確保のため神経や体力を相当に使いますので、常に体調をベストに保つ配慮が欠かせません。また、年齢と共に運動能力や判断能力が低下することを考慮し、時々自分を見つめ直し、体調のチェックを行うことが必要です。

プロドライバーは、日頃から体調の維持管理に努め、常に体調をベストに保つよう心掛けましょう。

●気持ちの管理

A はベテランの運転者であり、堅実な仕事ぶりが評価されていました。しかし、今回の事故の際は、乗務時間が長くなり、しかも交通渋滞で到着時間の遅れを招いたことから気持ちに動揺を来とし、早く到着したい一心から相当に焦っていました。

その心理状態が、所定の運行経路を変更し、あえて人通りが多く、狭い市街地の生活道路を通ることになりました。

時間の遅れによる焦りから冷静な運転ができず、最もリスクの高い交差点通過時に脇見運転をしてしまい、とっさの危険回避ができず事故を起こしてしまいました。

安全運転を行うためには、平常心で冷静な判断ができる状態に気持ちを保つことが重要です。

そのための基本となるのが、体調管理とあわせて、

- ・ 時間に余裕を持つ
- ・ 気持ちにゆとりを持つ

ことを常に心掛け、それを習慣付けることが大切です。

運転者がその心掛けを忘れず毎日実践していけば、知らず知らずのうちに大きな力となり、安全運転の後押しをしてくれるものと思います。

平成21年度の神奈川県交通安全県民運動の年間



スローガンである、「安全は心と時間のゆとりから」を実践しましょう。

② 状況に応じた運転

事故発生場所は、信号機のない交差点で急な下り坂、しかも当時は強い雨で見通しが悪いという悪条件で、運転上最も注意を要する状況にありました。

運転者は、道路、交通、天候等どんなに悪い運転条件の下であれ、その時の状況を的確に把握し、その場に応じた適正な速度や車間距離を保持するなど、安全運転に努めなければなりません。

速度や車間距離は、主に幹線道路では注意を傾けますが、実際はこの事故のように、住宅街等の狭い道路で速度の出し過ぎ等が原因で事故となるケースも多く、その時々状況に応じた適切な運転が必要です。

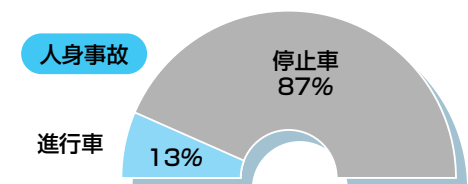
③ 夜間の運転

本事故は、歩行者や自転車が被害に遭う事故ではなかったものの、夜間の住宅街などでは、暗闇から飛び出してくる歩行者等の発見が遅れ、重大事故となるケースも多く、十分な注意が必要です。

運転者は、歩行者等のルール遵守への過剰な期待を抱かず、むしろ信号無視や無理な横断等が当然あるものと予測し、また夜間は、視界が十分でないことを念頭に危険意識を強く持ち、周辺への警戒心を怠らず、「危険を予測した運転」をすることが肝要です。

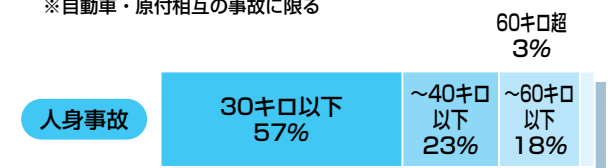
●前車の状態別追突事故発生状況

※自動車・原付相互の事故に限る



●第一当事者の直前速度別追突事故発生状況

※自動車・原付相互の事故に限る



< (財)交通事故総合分析センターの分析結果(抜粋) >